

備忘録 夢の街跡 “楠田行展”

みなさん、こんにちは。季節はすっかり秋ですね。秋といえば読書の秋、行楽の秋。一冊の小説とともに素敵なスポットもご紹介できればと思い、筆をとらせていただきます。

— 日蔭に住む女たちが世を忍ぶ後暗い男に対する時、恐れもせず嫌いもせず、必ず親密と愛憐との心を起こす事は、夥多の実例に徴して深く説明するにも及ぶまい。 —

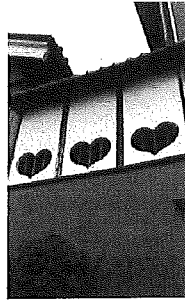
近代の小説家永井荷風は、「遷東綺譚(ぼくとうきだん)」の中でこう言いました。「遷東綺譚」は昭和12年に発表された、東京の私娼窟玉の井を舞台にした小説です。僕にとって心に残る言葉だったので、読後直ちにこの言葉を雑記帳に書き留めました。現在の僕は、未婚で、また、特定の相手がいるわけでもありません。去年の暮れ悲しさが溢れていた時、勇気をくれた素敵な人との出会いが、これに似ていると感じたからです。

玉の井は、いわゆる「赤線」地帯だった町で、赤線は今風に言えば風俗街です。戦後混乱期の昭和21年、当局が世相を落ち着かせるため、また遊歩税徴収の意図から元遊郭(貸座敷免許地)や私娼街を中心に指定し、事実上の公娼地域としたものです。全国に約1100ヶ所あったようで、警察が女性街を分かりやすくするため、地図を赤い線で囲んだことから「赤線」と呼ばれるようになったといえます。因みに赤線は現在、その役目を終え法律上存在していません。

僕が住む奈良県にも赤線がありました。中でも僕は、大和郡山の町並みが好きです。同市は筒井順慶の統治以降、城下町として栄えました。特産品は「金魚」で、また春には「さくらまつり」も行われ、城郭に咲く夜桜の名所として親しまれています。そして、夜桜の美とともに咲き誇った、洞泉寺町と東岡町の存在がありました。コミュニティー新聞「サンデー郡山」昭和32年の記事には、洞泉寺に16軒、東岡には29軒の妓楼が存在したそうです。現在はどうなのでしょう。

東岡町は平成23年現在、荒廃の只中にあり風前の灯といった具合です。近く跡形もなくなってしまうかもしれません。同市の景観形成ガイドラインによれば、洞泉寺は歴史的町並みエリアに組み込まれていますが、東岡は入っていません。何故かは言及しませんが、個人的にはやはり寂しいなと思います。他方、洞泉寺町では今も、精緻な木格子や意匠を凝らした欄間、飾り窓などを配した遊郭建築が見られ、往時の雰囲気に入ることができます。郡山の特長は一軒一軒が大きく、3層楼が多い点にあります。とくにハート型に切り抜かれた窓をもつ楼閣には、圧倒されることでしょう。近鉄大和郡山駅、東に徒歩10分で洞泉寺、南に10分で東岡。僕がおススメする町並みです。

遊郭や赤線が女性にとって‘苦界’という意見があるのはもちろん知っています。しかし僕は、その中で繰り広げられたであろう‘人間くさい素敵なドラマ’を想像し、歩くことに大きな魅力を感じています。 誠



ハート型の窓が異彩を放つ旧川本邸
(洞泉寺町)



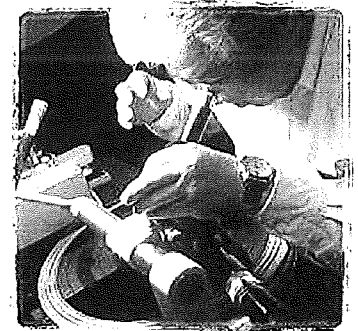
旧川本邸正面
3層楼閣の存在感は圧巻

information

今回で2011年のcollectiveはおしまいです。2011年もありがとうございました。2012年も皆さんにグルーヴとサウンドの恩寵がありますように。よいお年をお迎えください。

次回は2012年、冬の終わりごろを予定しています。また雲州堂でお会いしましょう。詳細はブログでご確認下さい。

<http://blog-collective.blogspot.com/>



Message from "himeee"

この度は、歴史ある「collective」にお声掛け頂き、誠にありがとうございます。スピール！インテリジェンス臭とどろどろとした中古レコ屋の薫り漂うDJの面々に囲まれて恐縮しきりです。

ただのパーティーフリークとして音&人&酒を糧に過ごしてきた私ですが、気付けば物書きを生業にしております。とはいえ、某メディア組織に属するイチ駒として、日々アップデートされる現場に赴き、森羅万象、社会情勢に心象風景、出来レースを切り取り、スケッチするルーティン。タレントの家に突撃し、インターフォン越しにマイクを向けることも。そう、おなじみのアレです。そんな現場至上主義の日常。言葉を選び、繋ぎ合わせ、アウトプットする作業はDJと似て非なる感覚かもしれません。それでも、紙とペンの力は音楽には敵わないのです。これSay it loud! 世界共通言語の“音”なしに、人の歴史は語る事ができない。“祭り、と共に語り継がれてきた文化なのです。

2011年現在、私が暮らし、全てを捧げてきた大阪のクラブ事情は非常に厳しい状況に。悲しい、悔しい、腹が立つ。言葉で収まりきれない色々な感情。きっと、大多数の人たちもそう感じている筈。パーティーは祈りの場。音を介して、人と人が繋がり、色んな思いを消化&浄化&昇華させる神聖な場所、且つ儀式とすら断言してもいい。でも、現実が現実。それなら、それなりに。発想ひとつで新しい事をやっとなきゃならないし、現在進行形で新たな遊び方が出来上がっていくフェーズなのは間違いない。今は、生みの苦しみの段階であると信じたい。

まあ、紙の上で反吐を繰り返しても、やりきれない感情は渾々と渦巻き続ける。変えたい現実。それでも、しれっと過ごさざるを得ない日常があったりしちゃう訳です。訳のわからないシステムに勝手に組み込まれることは、悲劇であり、喜劇でもある。歴史の見解から見ても、破壊から再生への課程は必然的に肯定されてきた節がある。所詮他人事は他人事。自分は自分の世界があるから。ひとり対世界相手じゃ喧嘩にならねえ。科学技術が発展したからって、脳ダダ漏れ状態じゃお話になんない。ギャグ考える過程パレちゃったら、オチ、つけられないからっつーの。脳 Doubt. だったらおピースにいきましょうよ！ やってらんねえとクダを巻き巻きしながら、飲み干すビール。場所は決まってスピーカーの前。片手にタバコ。隣にはいつものアイツ。そんな至上至福の時間を共有できることは幸せこの上ない。口角も自然に上がります。

確信を持てたのは、日本、いやアジア随一のレコードプレス会社「東洋化成」にタモリ倶楽部ばりに社会見学に行ったこと。そして、もはやギャグで大ネタ・自身の連載「お姫フィッシング」(釣り素人がどこまで釣りをエロく書けるかに挑む。サンスポにて絶賛不定期連載中w。お恥ずかしい...)。え？針とルアー？塩化ビニール？！そんなステキなご縁∞ (※編集注:表紙写真を参照)

ハビインファン！人生楽しんだもんがち。モチロン、日々の現場と仲間のお陰sosoデフ。
セイブ・バイナル♡キープ音ディギン♡

自著『釜ヶ崎のスメ』を語る "tawaki"

普段はみなさんと仕事のことを話す機会が多くないのでご存知ない方もいらっしゃると思いますが、僕は大学に所属しながら都市下層の研究をしています。「下層」で何や？と思われるかもしれませんが、「経済的社会的にしんどい層」と思っていたら差し支えありません。

サラリーマンが集住する郊外で育ってきた僕は都市下層に対する「畏れ」と同時に「憧れ」のようなものを強烈に抱いてきました。中産階級ばかりが暮らす地域で、例外的に母子家庭で育った僕の経歴がこのようなアンビバレントな感情を生み出したのかもしれませんが。

そこで僕は自分自身の謎解きも兼ねつつ、大学院への進学を契機に本格的に都市下層の研究をするようになり、以前から気になっていたホームレス問題のことや貧困地域のことを把握するべく、大阪市西成区にある釜ヶ崎でフィールドワークを始めて早や10年近く経とうとしています。

僕が属する大学の業界は大学院を出た後も経済的に自立することは困難で、正規雇用の道はかなり険しいものです。僕自身、32歳になった今もウダツのあがらない非常勤講師として複数の大学をハシゴしています。そんな釜ヶ崎ではソーシャルワーカーとしても仕事をさせてもらっており、それが僕の生活の経済的な支えになっています。

釜ヶ崎のおかげで今の僕の生活が成立しているといっても過言ではないのですが、つい先日、仲間と一緒に『釜ヶ崎のスメ』(洛北出版)という本を出版し、ようやく釜ヶ崎での活動を総括することができました。長年お世話になった釜ヶ崎にいくばくかの恩返しのできたのではないかと安堵しています。

みなさんは釜ヶ崎で起こっていることは自分たちの暮らす街とは無関係だと思われるかもしれませんが、いまや孤立や失業は身近な問題です。釜ヶ崎では「生きづらさ」が深刻であるがゆえに、逆説的に「生き抜く知恵」が鍛えられてきました。「僕たちは釜ヶ崎に学ぶことが多くある」。そんなコンセプトで本を作りました。この本は地理、歴史、労働、建築、社会福祉、宗教など、様々な観点から釜ヶ崎を描いており間口の広さが特徴です。また、高校生でもわかるように、平易な語り口に徹しました。おかげさまで、書店でも良い感じにフィーチャーされ、新聞でも紹介されました。本離れが嘆かれる昨今ですが、こはひとつ「読書の秋」ということでススメさせていただきます。



原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓 編著
『釜ヶ崎のスメ』(洛北出版)

名曲探訪 Tr.001 "kengo matsui"

1年前から音楽理論を学校で学び始めましたので、その勉強を兼ねつつ、今回から皆さんと名曲の楽曲構造を愛でてみたいと思います。初回は大貫妙子「都会」(作詞作曲:大貫妙子、編曲:坂本龍一)です。1977年のアルバム「SUNSHOWER」収録。ブラックミュージックテイストのスムースかつファンキーなアレンジで、シティポップス史上に輝く名曲です。

イントロは割愛し、冒頭の2フレーズ「♪眠らない夜の街 ざわめく光の洪水」の部分を見ていきます。このパターンが曲の中心になっています。

(キー:E♭メジャー)

①E♭M7 D7 Gm7 | ②B♭m7 E♭7 |

ねむらない よるのまち

③A♭M7 G7 Cm7 | ④Bm7 B♭7 |

ざわめく ひかりの洪水

この2フレーズは同じ形式で繰り返しになっており、後半は転調しているような感じです。前後半とも最初の3つのコード進行(①と②)は、ブラックミュージック系でたびたび見られる(らしい)進行の一部で、Grover Washington Jr. の「Just The Two Of Us」の冒頭3コードと同じ形式で進行しています。

また、①後半の「D7-Gm7」と③後半の「G7-Cm7」は、それぞれGm7、Cm7を中心としてみたとき、最も解決感=結句感=気持ちよさ(アガる感)の出るコード進行(ドミナントモーション)になっており、歌のフレーズ最後としての結句感になっています。

フレーズ間をつないでいる②と④(④のあとは①に戻る)の部分は、「ケーデンス」と言われる、所謂西洋的ポピュラー音楽の中で楽曲の解決感(気持ちよさ)をもたらず定番コード進行を形成しています。②は、③の先頭のA♭M7を調性の中心としたときのII m7 - V7 - I M7です。キーがE♭メジャーの世界のなかで、③の先頭「A♭M7」に向かって解決する進行を挟むことで、解決感(気持ちよさ)とともに一時的な転調(調性の中心が変わる)をしています。

④は機能的には②と同じですが、正面切った「ケーデンス」ではなく、「裏ケーデンス」とのコンボです。④は「Bm7-B♭7」となっており、これは③冒頭の「A♭M7」を中心としたときの「II m7 - II ♭7 - I M7」で、V7の代わりにII ♭7を使っています。この半音ずつずり落ちる進行が裏ケーデンスです。機能は同じですが、音の響きが違ってきます。また、本来この進行での「I」(解決先)は「A♭M7」ですが、曲は実際には①にもどるため、解決先は①冒頭の「E♭M7」です。「E♭M7」を中心(解決先)に見ると、④から①冒頭は「Bm7-B♭7-E♭M7」で、「B♭7-E♭M7」はドミナントモーションです。

つまりここでは裏ケーデンス的に「II m7 - II ♭7」と動き始めて「裏」的なムードを匂わせておいて、じつは最後に「V7 - I M7」の「表」で落とすという「ちょっとした裏切り」的なコンボが用いられています。このようにこの曲のポップさや気持ちよさは、楽器や音色だけでなく、コード進行の中にも気持ちよさを生み出す要素を張り巡らされデザインされていることがわかります。